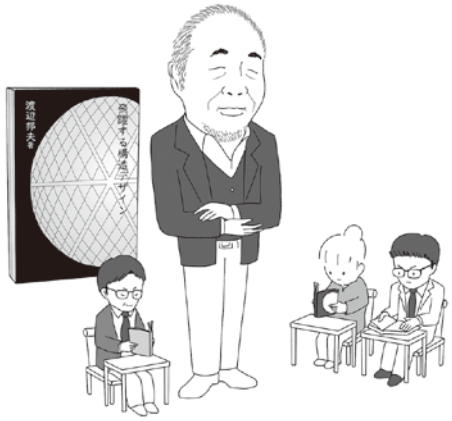
施工者に幸あれ 第78回

徹底した個性
構造家・渡辺邦夫

朝倉幸子◉TH-1
illustration：Taco



■SDG50年

「設計だけを50年やっています。渡辺邦夫という個性だけで…」。構造家・木村俊彦の元から独立したのが1969年。学校での教育に従事するならそれで一生を終わるべきという木村俊彦に則して構造設計一筋。しかし，多くの人材を世に送り出したSDG（Structural Design Group）のorganizerである構造家渡辺邦夫さんこそ教育者である。構造スタッフだけで90人余り，臨時採用を含むとその倍もの技術者を世に送り出した。本コラムでもSDGにルーツをもつ数人の構造家に登場いただいたが渡辺邦夫さんに深く傾倒して，かつそれぞれが独創的な構造家たちだ。その中の一人，腰原幹雄東京大学生産技術研究所教授の研究室で，自らの50年を語る渡辺邦夫さんは若々しく，旧知の覇志堂が促すまでもなく能弁なのでした。

■「構造デザイン」

「構造デザインは構造のあり方がそのまま建築表現になり，構造がつくり出す美しい空間のプロポーション，躍動感，緊張感，優れた居住性，それらを実現する構造計画の手法である」（『飛躍する構造デザイン』（学芸出版）から引用）。「構造デザイン」を力学，材料，施工，空間に分類し，さらに理論や工学，さらに力学は【学問と工学】に，材料と施工は【近代化と工業化】に，空間は【思想と個性】にした表で講説を受ける（表は前記著書に掲載）。

「建築家に従属しないエンジニアの考え方は，先人たちが考え展開させてきた」。その手法を方向付け定着させてきたのが渡辺さんなのだ。構造家が設計の大部分をカバーするようになり，建築家と鍛えあう関係を築くことが大切なのです，と語る言葉には今も微塵の揺るぎもありません。構造家がカバーする領域が広ければ広いほど，建築そのものの質は上がる。建築の中で一番進歩していないのが施工の分野。例えば，型枠でも昔からの習慣で決めてかかってはいけないのだと語る。今までの概念としての永々と変わらない常識を変えなければならない。

問題は，建築基準法について考え直すことが行政に欠けていることにある。義務付けられた一級建築士の講習を受けないので，資格を剥奪されるらしいと言って大笑いされる，戦う構造家なのです。

■相互関係

建築家・槇文彦との初めての仕事は，第1回JSCA賞受賞の幕張メッセである。与えられた30か月。設計10か月，施工20か月としたら完璧な施工計画をしなければならないと判断。「どうデザインするかより，それが優先です」。巨大な建物の床をPC造でつくり，屋根を無柱で架けることを提案すると「宜しく」と任せてくれた槇先生。「並みの建築家ではない」と語る渡辺さんです。

朱鷺メッセ連絡デッキ落橋では，構造設計のミスではないことは司法の場で立証された。ご自身が裁判の被告人となり動いた結果というが，それまで築いた仕事の体制を大きく変えるものになる。国内のプロジェクトからは敬遠されてしまった。韓国，台湾，中国など10を超える国々でのコンペに活動の中心を移すことにした。そして，18年間で81のコンペに参加，44が当選しているとは凄い構造家なのである（コンペ忘備録より）。

「僕は長い間，設計とは何かについて考えてきた。ごく簡単に設計の本質をいえば，モノとモノ，モノとヒト，ヒトとヒトとの相互関係を分析して，新しい相互関係の秩序の発見にある」著書，構造デザインのプロローグの一文に深く心を打たれる。